Max Weber

マックス・ウェーバー

その学問の全体像

ラインハルト・ベンディクス著
折原　浩訳

中央公論社刊

MAX WEBER An Intellectual Portrait
by Reinhard Bendix
originally published by
Doubleday & Company Inc., 1960
Anchor Books edition : 1962

折原 浩 (おりはら・ひろし)
1935年，東京都に生まる．58年，東京大学文学部社会学科卒業．64年，東京大学文学部助手．65年，東京大学教養学部講師，66年，同助教授．
主要論文に「アノミー」「信念体系と疎外の問題」「マージナル・マンとしてのマックス・ウェーバー」「Intellektualismus と Rationalisierung」「マックス・ウェーバーと辺境革命の問題」など．

マックス・ウェーバー
——その学問の全体像　©1966　定価1000円
昭和41年11月5日初版印刷　昭和41年11月15日初版発行
著者　ラインハルト・ベンディクス　発行者　宮本信太郎
訳者　折原 浩　印刷者　草刈親雄

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2-1　振替東京34番

序

この書の原著者ラインハルト・ベンディクスにはじめて会ったのは、一九五〇年春のことだった。その前年の暮れからわたくしは、アメリカ政府の招きで合衆国各地の大学を歴訪し、社会学を中心とするアメリカ社会諸科学の現況を視察していたが、ワシントン市を起点とするこの遍歴の終点が、はしなくもベンディクスのいるカリフォルニア州バークレー市の加州大学だったのである。

ベンディクスは当時まだ三〇歳を少し出たばかりの青年学徒だったが、マックス・ウェーバーの研究家としてすでに日本にも名を知られていたので、政府のはからいで各地の主人役（ホスト）を自由にえらぶことのできたわたくしは、このサンフランシスコに近いバークレーでのホストとして、まだ会ったこともないベンディクスを名ざしていろいろ手配をたのんでおいた。加州西海岸の美しい海辺に沿って北上する急行列車に乗り込んで、わたくしがただひとりロスアンジェルスからサンフランシスコに着いたのは、四月のある晴れた夕方だった。あらかじめ電報で出迎えをたのんではおいたが、おたがいにまだ一面識もない間柄なので、はたして大勢の出迎えのなかからうまくベンディクスを見つけ出せるかどうかは、ちょっとおぼつかなかった。ところが、サンフラ

ンシスコ駅でのこの出会いは、実際には一瞬のためらいもなく、いとも簡単におこなわれ、わたくしはそこからベンディクス自身の運転する車に乗って、長いベー・ブリッジを渡り、夕闇のたちこめるころ対岸のバークレーに着いた。それから日本へ帰るまでの約一週間の滞在は、このときのアメリカ旅行中もっとも印象的なものの一つだったが、これについてはここでは触れない。

ただ、当時のベンディクスは、加州大学へ来てからまだ間もない助教授で、社会学科内での発言力も少なく、業績もまだあまり多くなく、そのうえ、ヒトラー政権に追われてドイツから移住した彼にとって、アメリカでの教職生活にもいろいろ悩みは少なくない様子だった。どちらかといえば地味な学究肌で、あまり愛想のよいほうではない彼は、この時代にはとくに浮かぬ顔つきをしていることが多かったように思う。バークレーに着いた晩、招かれて訪れた彼の家も、その後新任の若い助教授たちがつぎつぎにそこを借りたという町はずれの質素なフラットで、ベンディクスはここにドイツ生まれの働きものの奥さんとふたりきりで住んでいた。飾り気のないだだっ広い客間で、ドイツ流の家庭料理をご馳走になったことを思い出す。

それから八年たって、わたくしは再びバークレーの加州大学を訪れた。ただし、このたびは通りがかりの旅人としてではなく、この大学から招かれた客員教授として、家族づれで一年近くをここですごすために。この八年のあいだに、加州大学の社会学科は大きく変わっていた。以前には、ハーバード、シカゴ、コロンビアなどの名門諸大学のそれにくらべれば二流どころと考えられていたものが、この一九五八年には、二〇名余のスタッフを擁し、質的にもアメリカではもっとも粒ぞろいの社会学科の一つに数えられるまでに成長していた。そして、それ以前すでに正教授に昇進していたベンディクスは、ちょうどその年、この大社会学科の主任教授

此为试读，需要完整PDF请访问： www.ertongb

にえらばれていたのである。

それは一九五八年のある秋の晩のことだった。わたくしたち夫婦は、彼に招かれて、数年前に買ったというその新居を訪問した。新居といってもこれはかなり年数のたった家だったが、八年前のフラットにくらべればはるかに立派な二階家で、しかも高みにあるほど地位も高いといわれる市街を見おろす丘陵の、かなり高いところに建てられていた。すでに三人の子供があったので、彼自身の書斎は二階からさらに階段をのぼった屋根裏部屋のなかに設けられていた。食事のときいろいろ昔話が出、八年前にくらべるとひとまわり大きくなった感じのベンディクスは、よく笑った。それから話は著述のことに移って、日本の学者はなんのために本を書くか、アメリカでは准教授までは主として昇進のために書くのだ、というような会話があり、では正教授になった君はなんのために書くのか、というわたくしの質問にたいして、それを待っていたかのように彼は、「ぼくは書くこと自身を楽しんでいるのだ」と答えた。

この八年間に、彼は大著『産業における労働と支配 *Work and Authority in Industry*』（一九五六年）のほか、いくつかの編著や論文を発表していたが、ちょうどわたくしが行ったころは、この訳書のオリジナルである『マックス・ウェーバー *Max Weber: An Intellectual Portrait*』の終わりの部分を執筆中だった。ベンディクスの博学と精励は、アメリカの学者のあいだでも有名である。

そんなところから、わたくしは彼の仕事場を見たいと言いだし、彼はこころよくこれに応じて、前記のアーチックにある小さな書斎に案内してくれたが、ここから眺めおろすサンフランシスコ湾の夜景のすばらしさは、いまでも忘れられない。湾をはさんで手前にはバークレーとオークランドの町が光の海のようにひろがり、べ

ー・ブリッジを渡った遠い対岸には、やや高いところにサンフランシスコの市街地のあかりが、青く、白く、宝石のようにきらめいていた。ベンディクス自身も、仕事をしながらときどきこの夜景に見とれて時間のたつのを忘れる、と言っていた。

こんなことがあってから早くも一年近くの月日がたち、その翌年の九月、わたくしたちは加州大学での任期を終え、北イタリアのストレーザで開かれる国際会議に出席するためにヨーロッパへ出発した。その少しまえ、ベンディクスに会ったとき、彼はもうすぐ彼の『マックス・ウェーバー』が出版されるが、だれかこれの日本訳を試みる人はいないものだろうか、とわたくしにたずねた。これにたいしてわたくしは、ひとり適任な若い社会学者がいるが、訳者をえらぶまえに、まずその校正刷でも見たいものだ、と答えた。わたくしとしては、このときすでにこの書の訳者折原浩君のことを考えていたのだが、同君に翻訳の意思の有無をたずねるまえに、あらかじめバークレーから原書の校了ゲラでも送って検討しておいてもらおう、と考えたのである。

ところが、ベンディクスがその校正刷を実際に渡してくれたのは、ストレーザの国際会議の最中だった。美しいマジョーレ湖畔のレストランのテラスでイタリア葡萄酒の杯をかたむけているところへ突如としてあらわれ、大きな棒ゲラの束をどさんとテーブルの上におき、「これが約束の校正刷だが、よろしくお願いします」と言って、さっさと向こうへ行ってしまったときの彼の様子は、いかにも彼らしかった。大荷物をかかえて帰国する途中だったわたくしは、仕方なく、この棒ゲラの束を小包にしてストレーザの郵便局から発送したが、目次と序章のページだけは荷物にはさんで持ち帰った。ずっと遅れて東大に届いたこの校正刷を折原君に見せて、翻訳のことを相談したのは、たしか一九五九年の暮れだったと思う。この書物の初版が完成したかたちで

ダブルデー社から出版されたのは、その翌年（一九六〇年）の春だった。

この書物の翻訳を立派な日本語で仕上げうる適任者とわたくしが考えた折原君は、幸いこの仕事を引き受けてくれたが、当時同君はまだ東大大学院の学生で、しかも修士論文を準備中の身だったので、翻訳の仕事が実際に着手されたのは、この修士論文が優秀な成績でパスして同君が博士課程に進んだ一九六一年の春からだった。それ以来、六四年の夏まで三ヵ年余、全五二二ページにおよぶこの充実した著作の日本訳の仕事は休みなくつづけられた。しかも、この仕事のやり方たるや、折原流の徹底したものだった。たとえば、この書にはウェーバー自身の文章が全巻を通じて七〇〇個所ほど引用されているが、訳者はこのひとつひとつについてドイツ語の原典にあたってベンディクスの英訳を検討したばかりではなく、原典のページ数と既刊の代表的日本訳のページ数とを注記する、ということまでやっているのである。

こうした徹底ぶりのために、翻訳の仕事はかなり手間取り、原稿が中央公論社に渡されたのは、訳者が大学院を修了して東大文学部の助手をやっていたときだった。そのうえ、いろいろの都合で印刷の着手が遅れたため、校正刷が出はじめたのは一九六五年の夏になってしまった。ところが折原君は、この校正をやっているあいだにも、インドや中国の専門家の門を叩いて、ウェーバーの書物にたくさん出てくる専門用語の適訳を得るための努力をはらっている。

このような並々ならぬ努力の成果であるこの訳書が、翻訳書の従来の水準をはるかに抜くものであることは、わたくしの疑わぬところであるが、一方このようにして訳し出されたベンディクスの原著自身も、いろいろの点で、これまでのウェーバー解説書とは異なる特色をそなえていると思う。たとえば、著者自身が序章で述べ

ているように、この書物はなによりもまずウェーバーの学問の全体像を読者に与えることを試み、しかもそれに成功している。十数巻におよぶ複雑なウェーバーの全著作をほぼ洩れなく取り上げ、しかも初期の諸研究から後期の諸体系にいたるウェーバー自身の問題意識の展開を忠実に、また系統的に跡づけ、これを一つの全体像にまとめあげるという仕事は、これまで試みられはしたが、いまだこのように成功したことはなかった。

また、この書では、さきにも触れたように、ウェーバー自身の言葉を豊富に引用して、個々のばあいに解説者が示そうとした点が原典ではどう表現されているか、を明らかにしている。こうした配慮は、この書物をウェーバー研究者のためのすぐれた入門書としていると思う。

最後に、この書物が、原典はもとよりその翻訳書の大部分よりも読みやすく、明快に、かつ興味深く書かれていることを、ぜひ指摘しておきたい。このことは、一度でも原典のあの難解な文章に接して苦しんだことのあるものにとっては、大きな救いである。そして、この書をこのように平易明快な読みものにした功績の少なくとも半分は、わたくしは訳者の折原君にあると思うのである。

一九六六年九月

尾高邦雄

謝辞

著者は、本書の内容にたいする論評と構成にかんする示唆を、つぎの方々におうている。カリフォルニア大学（バークレー）のロイド・A・ファラーズ教授およびレオ・ローウェンソール教授、ウィスコンシン大学のハンス・H・ガース教授、東オレンジ・ウプサラ大学のケーテ・メンゲルバーク教授。また、カリフォルニア大学（バークレー）のウォルフラム・エーバーハード教授、インド・デリー大学のM・N・スリニヴァス教授は、本書の5章と6章にかんする詳細な批評と示唆をもって、著者に裨益された。最後に、さまざまの論点にかんするガンサー・ロースとピーター・シュランの助力に感謝したい。

ダブルデー書店のアン・フリードウッドと私の妻は、草稿の文章を大いに改善し、読みやすくしてくれた。原稿をタイプするさいのジャネット・ポドヴィン夫人の配慮と助力に、著者は感謝している。

凡例

1 本書は Reinhard Bendix, *Max Weber: An Intellectual Portrait,* 2 nd. ed. (New York: Doubleday & Company, Inc., 1962), 522 ps. の全訳である。原著は、一九六〇年にニューヨークのダブルデー書店から出版されたが、二年後、新たに15章を加え、序章および10章の一部を改訂して、同じくダブルデー書店から Anchor Books の一分冊として再版された。本書はこの第二版を訳出したものである。

2 本文中、前後を一行あけ一字下げて組んである部分は、原著者ベンディクスがマックス・ウェーバーの原典ないし英訳本から引用した文章の邦訳である。訳出にあたっては、すべて原典と照合して、誤りなきを期した。

3 本文中、〔 〕内に挿入した字句は、原著者の論旨を判明ならしめるために、またそのかぎりで、訳者が記したものである。これにたいして（ ）はすべて、原著者自身が挿入しているものである。

4 注は、原著では各ページに脚注として入れてあるが、本書ではすべて巻末にまとめた。この原注においても（ ）は原著者のもので、〔 〕は訳者の挿入である。

5 原著者がイタリック体を用いて注意をうながしている語句には、本書では傍点を付した。なお、原著ではイタリック体となっていないけれども、邦文では傍点をつけないと文意や論脈が不明確になるようなばあいは、訳者が、原著者の意図をくみ、ウェーバーの原典とも照合したうえで、訳者の責任において傍点を付したところもある。

6 原著者が（ ）内に掲げている原語は、本書では（ ）をはずして、訳語のすぐあとに挿入した。なお、主要な人名で注に原語が記されていないものについては、本文中の訳語のすぐあとに原語を挿入した。

7 ウェーバー特有の用語、および、論脈に応じて訳語を使いわけた語句には、頻繁にルビをふった。

8 人名、地名その他の固有名詞については、原地読みにしたがう表記を原則としたが、原地読みが不明ないし不確定のばあいには慣用あるいは英語の発音にしたがって表記した。

9 術語にあてる訳語の選択では、原則として『社会学辞典』〔有斐閣・一九五八年〕にしたがったが、他の訳語も一般におこなわれているばあいには、初出のさい〔 〕にくくって併記した。

10 原著が使用している年代は、わが国でふつうにおこなわれているものと異なっているばあいがあるが、本書では、原著のものを記した。

11 本訳書においては、原著よりも多く改行している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

12 本文および原注のなかに出てくる史実その他について詳細な訳注を付することは、とりやめた。なぜなら、そのような訳注を付するとなると、ウェーバー社会学の包括的全体像を提示するという本書の性格から、いきおい、広大なウェーバー社会学の全領域・全範囲にわたらざるをえなくなり、それは訳者の能力を超えるばかりか、もともと浩瀚な本書をさらにふくれあがらせてしまい、そうなると、「論脈逸脱によって読者に負担をかけることなく、ウェーバーの労作を示す」〔8ページ〕という原著者の意図にももとるのではないか、むしろ、原著をいちおう自足完結的な解説書と考えて、訳注は原著者の言わんとするところを判明ならしめる随時の補注〔　〕にとどめるべきではないかと考えたからである。

13 ただし、「原典研究への手引き」〔4ページ〕という原著の性格を重視し、原著者の引用個所・参照個所〔約七〇〇〕について、そのつど原典・邦訳本・邦語参考文献のページ数を〔　〕内に記し、読者のために参照の便宜をはかった。読者はこれによって、原典研究にすすまれると同時に、数多のすぐれた邦訳をひもといて、各領域の専門家によって付せられた詳細な訳注を参照していただきたい。

14 注をすべて巻末にまとめたのも、読者に、まず本文を通読して、原著者ベンディクスの構成するウェーバー社会学の全体像を把握していただきたいからである。しかるのちに、注や補注を利用して、原典とひきくらべられながら原著者の解釈の当否を検討し、あわせてウェーバー社会学の全広袤と内奥に迫っていっていただきたいと思う。

15 訳者は、原著者とともに、マックス・ウェーバーの業績の価値を確信しており、それがこの訳業の前提ではあるが、しかし、その業績を学ぶことが、われわれ自身の生活営為にとって、また未来の模索にとって、いかなる意味をもつかという、その確信の実質的理由は、原著者とは若干異なっており、この点については「訳者あとがき」で述べる。ただし、本書はあくまでも原著者ベンディクスの著書『マックス・ウェーバー』の忠実な邦訳であって、その点における見解の相違が訳文そのものに影響をおよぼしていることはけっしてない。

目次

序（尾高邦雄） i
謝辞 vii
序章 3
I ドイツの社会とプロテスタンティズムの倫理
1章 経歴と個人的志向 9
2章 初期ウェーバーの研究と学問的基礎視角の決定 19
A 農村社会と取引所の調査 20
B ドイツ社会の構造 21
C ウェーバーの学問的基礎視角 36
3章 西ヨーロッパにおける経済の合理性の諸相 48
A 資本主義の精神 55
B プロテスタンティズムの倫理 55
C 原因としての観念、結果としての観念 60
D 取引きの倫理と中世都市 69
II 社会・宗教・世俗倫理——諸文明の比較研究 74
4章 序論 83
A 身分と階級 84
85

B 宗教指導者 88
C 大衆の宗教意識 93

5章 中国の社会と宗教 98

A 西ヨーロッパとの対比、および初期の歴史 98
B 王朝政府と社会構造 108
C 読書人層と正統儒教 114
D 国家の祭祀と民間信仰 123
E 儒教とピューリタニズム 131

6章 インドの社会と宗教 139

A インドの社会構造 139
B インドの初期の社会組織 152
C 正統ヒンドゥー教とバラモンの復興 163
D 世俗倫理 185

7章 古代パレスティナの社会と宗教 192

A 禁欲の諸類型と古代ユダヤ教の意義 192
B 古代パレスティナの歴史と社会組織 197
C 部族連合時代・初期王制時代における政治組織と宗教思想 205
D 政治的没落・宗教上の対立・旧約の予言 222

8章　マックス・ウェーバーの宗教社会学　246
A　理論的基礎視角　246
B　分析の諸方法　256

III　支配・組織・正当性——マックス・ウェーバーの政治社会学　267

9章　政治社会学の基礎概念　268
A　利害と支配　268
B　支配・組織・正当性　272

10章　カリスマ的指導と支配　279
A　カリマス的指導　279
B　権威にもとづく支配の局面としての家カリスマ・制度カリスマ　288
C　カリスマ的支配下における権力闘争　297
D　理論的な含み　304

11章　伝統的支配　308
A　家父長とその家計　309
B　家産制　312
C　封建制　336
D　近代国家の諸特徴　356

12章　依法的支配I——法の合理性の出現　360

A 序論的考察 360
B 法の合理性の出現 365
13章 依法的支配II――近代国家と権力闘争 388
A 近代国家とその正当性 388
B 官僚制 393
C 依法的支配下における権力闘争 400
14章 現代の視点からの展望 426
15章 マックス・ウェーバーの社会像 435
A 思想上の親和関係 435
B 社会と統治 438
C 古代ユダヤ教 443
D 依法的支配 447
E 思想史的展望と位置づけ 450
文献使用上の注意、ならびに原注 459
訳者あとがき 555
索 引 622

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb